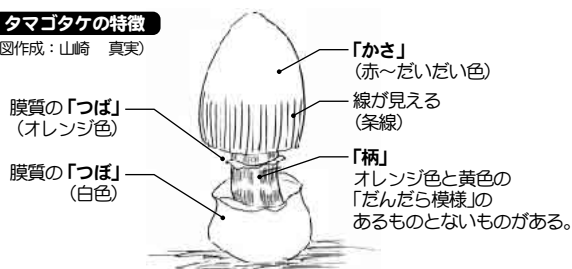


知る人ぞ知る『きのこ』

タマゴタケ(テングタケ科テングタケ属)は、北海道では夏から秋にかけてコナラ、シラカバなどの広葉樹林・針葉樹林などに発生するキノコです。このキノコは樹木の根と共生しています。赤い色しているキノコは毒キノコというイメージがありますが、このキノコに限ってはとてもおいしいキノコなのです。

北海道のタマゴタケは、柄の部分にだんだら模様がないものが多く、ヨーロッパのものによく似ています。反対に、本州ではだんだら模様のタマゴタケの発生が多く、今後それぞれのタマゴタケを詳しく検討する必要があるかもしれません。

タマゴタケの特徴 (図作成：山崎 真実)



一度食べるとやみつきになるそうで、キノコ通の人たちの間ではこのキノコを採集する人が増えています。食べ方はいろいろですが、主な料理はてんぷら、バター炒め、煮物、卵とじ、お吸い物などを使うとうまみのあるだしがでます。夏に発生するものはカサの肉が早く傷むので、腐らないうちに塩水で虫だしをして料理します。

キノコを通じてお付き合いしているイタリア中部トスカナ地方在住のポンテナーニ夫妻はご主人が根っからのキノコ好きです。“キノコの王様”と言われるポルチーニ(ヤマドリタケ、ヤマドリタケモドキ、ススケヤマドリタケ)はもちろんのこと、ご夫妻が札幌に滞在中は「北海道ではキノコがどのような場所に発生するか」について興味をもって探索していきました。ササの生えないイタリアとちが

い北海道はササが多いこと、真駒内公園を散歩中にだんだら模様のない *Amanita caesarea* の仲間を見つけて、北海道にも模様のないものが発生すること等に興味をもたれたようです。早速、試食して気が付いたのは「イタリアのキノコとちがって、こちらのキノコは少しカビ臭い味がする」とのこと。発生する場所、土壌、樹木の違いで少し味が変わるのかと想像しています。夏と秋とでは発生した場所でキノコの味が違うのか、今後観察して試食してみようと思っています。ちなみにイタリアでは日本と同じくてんぷら料理にするほか、うすく切ってレモンとオリーブオイル、塩、コショウをまぶして食べるそうです。

私も一昨年(2002年)から9月に入って採集したタマゴタケをてんぷらにして食べていますが、とてもおいしく食べることができました。カビ臭くはなかったので、イタリア人と日本人とでは食の感覚が違うのかもかもしれません。タマゴタケを見つけたら、必ず鑑定してもらってから試食してみたいはいかがでしょうか？

【市民グループ藻岩山きのご観察会事務局長 張替 宣男】

特に注意！

猛毒のタマゴタケモドキ *Amanita subjunquillea* とベニテングタケ *Amanita muscaria* はタマゴタケにととてもよく似ているので見間違いのないように！ベニテングタケは傘のいぼが雨で流されがちなので試食は信用できる詳しい人に見てもらってからにしましょう。

▼だんだら模様のあるタマゴタケ



▼だんだら模様のないタマゴタケ



(撮影：いずれも張替 宣男さん)

キノコについてのお問合せ先

札幌市保健所食品指導課(中央区大通西19丁目) 電話 011-622-5151

博物館での実習を終えて… 大学生から一言



9月11日～25日に博物館実習を行いました。3大学から合計21名を受入れ、短期間ですが学芸員の仕事として、室内：展示シナリオ作成、普及教育事業プログラム案作成、化石クリーニング、化石のレプリカ作製、野外：植物採集・標本作製を実習しました。学生の感想の一部を紹介します。

博物館実習とは？～博物館の現場で学芸員の仕事を実際に経験する、学芸員の資格をとるための必修科目です。

北海道教育大学

● やっていく中で感じたのは、博物館、学芸員は研究だけでなく啓発活動も重要で、逆もまた然りだということです。積極的な興味・関心をもってもらうことはとても難しく、今でも試行錯誤の途中で、更なる進化には努力が必要だと実感する実習でした。

【後藤 貴子】

● 古沢さんから講義を頂いて、ハッと気付いたことは、「札幌には札幌の総合的博物館がない」ということだ。そして現在構想中であると伺い、札幌市民が誇れるような博物館を作っていけたら良いと強く思う。博物館が博物館として、未来のために現在あるものを保存していく。このことが重要であると、植物の標本化や化石の扱いで学ぶことができた。

【松林 かおり】

北海道武蔵女子短期大学

● これまでは自然系の博物館、と言われてもよくわからないことばかりでしたが、今ではもっと知りたい、他の人にも知ってほしいと思っています。このセンターがなるだけ早く、博物館となることを切望します。【鎌田 美江】

● 博物館活動センターの博物館としてのあり方や、海牛などの歴史を追っての話、そしてさく葉標本の水分を取る一つにしても丁寧で親切な指導に、ものに対する考え方を改めさせられました。

【西尾 梢】

● 実習に入って、最も強く思ったことは、自分の好きな物はとことん突き詰めろ、ということ。自分の好きな分野を隅から隅まで研究して、それを他人に知ってもらおう。【竹内 小綾香】

● 展示室に並べられている資料ひとつひとつが、どれほどの手間をかけて手入れされているかを身を持って体験することができました。博物館活動センターを訪れる人達の楽しい時間や発見の演出裏話を聞いたり、参加型教育事業・総合学習プログラムを企画したりする中で、今まで以上に博物館を身近に感じられるようになりました。【古出 朋妃】

● 実習を通して、何かを体験したり、実物に触れたりすることが、大切なことだと実感しました。活動を通し、学芸員の仕事だけでなく博物館自体にも興味を持つようになりました。【大原 拓幸】

酪農学園大学

● 実習を行い、博物館を見学者からの視点ではなく、職員としての立場から見ることができました。自分自身は放送大学を通じて学芸員の仕事を学んでいるため、展示方法や演出方法を見て、この博物館活動センターは、とても活気的で面白いものばかりでしたが、見る人によっては見学しづらい部分もあるそうで、伝えるという意味の難しさを教えてもらいました。さらに多くの博物館を見て、自分の中の知識を増やしていこうと思います。【泉 雄大】

● 人にどのように興味をもってもらい、人に伝えていくか、そのために何が必要かということを教えてもらいました。【石田 兼太郎】

さっぽろ水草採物帖

博物館で行っている水草調査の中から、札幌市内周辺地域で見られる植物を毎月1種紹介します。

【番外編】第26回水草研究会全国集会(秋田市)で発表。

全国の水草研究者、そして水辺の生き物を愛する人々が集まる水草研究会という学会があります。大学教授や大学生はもちろん、高校の先生や環境調査会社、動物園の職員などいろいろな顔ぶれが集まり水草についての情報交換をする場所です。

学会は8月21日・22日に開かれ、私は1日目の研究発表で「札幌市モエレ沼にてヒンジモを再確認する、ほか札幌市およびその周辺の水生植物相(中間報告)」として、旧豊平川やモエレ沼などの水草について主に写真で報告しました。

2日目は八郎潟周辺の水草の採集・観察会でした。見てください！水草採集のためなら、腰まで水に入るのは基本。日頃から顔中をヒルにかみつかれながら水に潜って調査しているという人もいました。なぜここまで捨て身になれるのか…。「仕事だから」、「論文を書かないと卒業できないから」、それだけの理由ではなさそうです。水草の生活はまだまだわかっていないことがたくさんあります。そんな“ミステリアス”なところも魅力なのかも知れません。

私も調査の成果を含め、水草の魅力を伝えられるようなミュージアムや展示、体験学習会などをつくっていききたいと思います。(山崎)



▲採集された水草を見ようと集まる会員たち。



▲マイ胸付長靴を持参する人も。彼は学会後、研究試料採集で北海道を一周してから神戸に帰りました。

豊平川に眠る人魚～カイギュウ化石～

③ 世界で最初の人魚

この宇宙にあるものすべてにはじまりがあるように、人魚に間違えられた海牛にもはじまりがあります。海牛はいつ地球に現れたのでしょうか？

今、世界でもっとも古い海牛の化石はカリブ海に浮かぶ島・ジャマイカで発見されました。化石は新生代古第三紀始新世、今からおよそ5000万年以上前のものです。二本足で歩くサル＝人間の祖先が登場する10倍以上昔に生きていたこととなります。ジュゴンやマナティーなど、今の海牛は完全に水中での生活に適応していますが、世界最古の海牛にはまだ立派な四本の足がありました。陸を歩くことができたのです。とはいっても、すでに海牛の特徴をいくつももっていました。骨は重たくなり、浅い水中に体を沈めて海草類を食べる暮らしに適応していましたし、鼻の穴は頭の上の面に開いており、水中で呼吸しやすい体つきになっていました。これ以降海牛はますます水中での生活に適応した体や機能を手にしていきます。後足が退化し、前足と尾の先端は水中移動に適したヒレ状になり、体は全

体に樽のような形(紡錘形)になり、現在の姿へと変わっていったのです。

海牛の祖先をたどる時、ひとつ残されている大きな問題は、今のところ発見されている海牛の化石が、四つ足からいきなり今の海牛の姿になっていることです。つまり、陸から海へ少しずつ適応していく途中段階の化石が発見されていないのです。どのように今の姿に進化していったのか？地球のどこかに眠る、この謎を解く化石はいつ眠りから覚めるのでしょうか。(古沢)



四本足で歩く世界で最も古い海牛の化石
(国立科学博物館)

今年の夏は暑(熱)かった!



体験学習会「昆虫採集会」7月31日(土) 定山溪百松沢林道

気温が高い日が多く、昆虫がたくさん発生していたようです。毎年同じ場所で採集会をしています。今年はミヤマカラスアゲハなど大物も採集できました。

大型動物化石総合調査「化石採取会」8月7日(土) 南区南小金湯

参加された市民のみなさんには、主にカイギュウ化石が発見された岩盤のかけらの中から、ふるいをかけて化石だけを取り出す作業をしていただきました。見つかるのは数パーセントの確率。大人も子供も文字通り時間を忘れて夢中になりました。採取された化石標本は研究資料として博物館活動センターで保管・利用されます。展示も予定しています。



そのほか、発見現場から20分くらい川の中を歩いて、浅い海にすむ生物のつくった巣穴の化石のたくさんある場所で化石発掘体験をしました。

野外実践講座② 海を読む 「漂着物から環境を読む」

9月12日(日) 石狩浜

ちまたでにわか(?)注目が集まっている漂着物集め(ビーチコーミング)。ロシア文字や韓国のハングルの書かれたペットボトル、救命胴衣、海水浴客の忘れ物などなど、講師の志賀健司さん(いしかり砂丘の風資料館学芸員)も初めて見る物がたくさん収集されました。ゴミでしかないものも、「どこから流れ着いたのか?」を推測することで川や海流といった自然の流れだけでなく、人間の生活にまで想像がおよんでいくのが漂着物集めの奥深いところです。

集めたもののなかから各自1つ「これだ!」というものを選び、いしかり砂丘の風資料館の展示物としました。また、台風18号の風で飛ばされてきたと思われるアサギマダラ(マダラチョウ科)も発見され、博物館活動センターの貴重な標本となりました。



▲北海道ならでは?! 子供用スキー。



▲ハングルの書かれたペットボトル。船の上から捨てられたものが流れ着いた?



▲ロシアのプラスチックピン。



▲アサギマダラ
(現在、展翅して乾燥中です。)



▲左から梅干しのタネ(漂着というより、海水浴客が捨てた?)、クルミの殻(川に運ばれ海に出た?)、オナモミ(何かにくっついたまま流れ着いた?)。

編集後記

来館者数 **31,504** 人 (2004年9月末現在)

ご自宅で実のなる木を育てている方も多いかと思います。今年の収穫はどうでしたか? さて、収穫ということは植物を「利用する」ということです。食文化を基本に、人間は様々な自然の恵みを原材料として生きています。人間より先に自然があったからこそ、人間が文化をもつことができたといえるでしょう。(ま)

